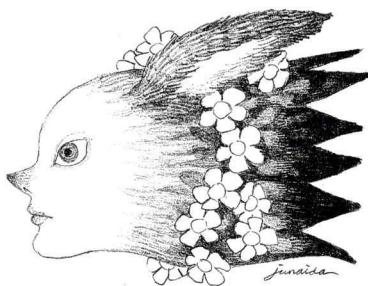


朝日歌壇俳壇



〈日曜日のブローチ 25〉 junaida

●佐佐木幸綱選

終わらないことが期待を高めゆくサグラダ・ファミリアみたいな渋谷（東京都）富見井高志「猪と知恵比べして採りし栗」送ってくれた妹の一筆（茅ヶ崎市）藤原 安美
昔火は身近にありき囲炉裏風呂線香うそく火鉢に竈（鈴鹿市）奥地 新吾
児童らは蔵主の樹水再生へ笹刈りに励む雨降る中を（伊賀市）福沢 義男
むらさきに遠嶺は暮れて穂すすきの十国峠にバスを見送る（三浦市）秦 孝浩
音のない稲妻に一瞬浮かび上がる廃村の家々むかしの賑はひ（生駒市）辻岡 英雄
病妻とふたり向ひ合ひする朝顔黙々と仕事をする如わびし（吹田市）鈴木 基充
大葉味噌乗せて食べる冷や奴記録つくしの夏の終わりに（ひたちなか市）富永喜恵子
灯台の明かりの届く処のみ大波小波寄せては返す（宮城県）須郷 柏
夏の雲嶺に連らねて丹沢の朝は始まるやや霞みつ（多摩市）豊間根則道

【評】第一首、渋谷の町とパルセロナのサグラダ・ファミリアを並べた意外性に感心した。第二首、「妹の一筆」の半分は本当なのだろう。第三首、言われてみると、身近だった「火」はほとんど姿を消してしまったようだ。

●高野公彦選

優しがる眼のままに逝きたりしハルウララ0勝10敗（東京都）上田 国博
わが家はみよこの戌亥ときおりは猪、鹿、猿の出没をきく（新潟市）太田千鶴子
彩雨から豪雨に変わり堤防を駆け上がる水止まれよ止まれ（千曲市）米沢 光人
待ち続けまた待ち続け早紀江さんは幾人総理を見送ったのか（観音寺市）篠原 俊則
ノーベル賞ほしきトランプは国防省換へてしまへり戦争省へと（横浜市）松村千津子
餓死があり食糧落下の荷でも死に兵役でも死に救いのないガザ（福島市）澤 正宏
太ももが悲鳴をあげる下り道これが最後だ喜寿富士登山（静岡市）小長谷建夫
一回の青信号で三千人渡る渋谷の一人となれ（橋本市）秋月 晶江
無駄足になったからこそ喜んでお金を払う糟の検診（京都府）片山 正寛
☆屋上でお化け屋敷の効果音みんな悲鳴の練習をする（奈良市）山添 葵

【評】1 首目、敗けても敗けても走ったあの馬への讃歌。2 首目、古今集の「わが庵は都の辰巳しかぞ住む……」の本歌取り。戌亥は北西。3 首目、綺麗な雨から豪雨になり、溢れる川を心配そうに眺める作者。4 首目、横田早紀江さんへの同情。

●永田和宏選

☆屋上でお化け屋敷の効果音みんな悲鳴の練習をする（奈良市）山添 葵
笑った顔が好きだと言われてから君の前では上手く笑えない（相模原市）榎本 ハナ
八月の六日は原爆忌ではなく命日ですと語る百歳（東京都）岩本 朗
国防省を戦争省と改称す原爆投下も止むなしと言う国（柏市）菅谷 修
カナヘビは金曜日には逃がします土曜静かな学童の午後（大津市）司馬田智世
わが影にどんぼの影がふれる時ふと思ひ出すもう会えぬ人（大津市）萩原 愛
「これ誰や？」白黒写真のぞきこみ指広げても大きくならず（西宮市）小原 幹男
家族分の高級パニアアイス買う何も聞かないことへのお礼（富山市）松田 梨子
負け続け美談にされてしまったが一回ぐらい勝たなかったよ（北秋田市）高橋 充
ハルウララ連敗記録大往生更新続く我が選外句（川崎市）杵刈 有邦

【評】山添さん、文化祭の出し物か。楽しすぎて悲鳴にならないんじゃないだろうか。榎本さん、笑い顔が好きと言われなくとも、笑顔を作るのはいつもむずかしい。岩本さん、一般名詞の原爆忌ではなくて、自分の大切な人の命日なのだ。

●川野里子選

夏終わる手押しポンプを押す子らよそれが地球の空気の重さ（大和郡山市）四方 護
父と子のキャッチボールに出くはせば電光石火のとき木洩れ日（三鷹市）宮野隆一郎
給食中トトロのうたが流れると30人の小トトロゆれる（知多市）高田 真希
図書館で借りた曽根崎心中のしおり紐だけ赤くて長い（高山市）西 春彦
床の青いラインをたどり緩くケア病棟までを無言で歩く（神戸市）松本 淳一
子規が逝き夫の正規が生まれし日実生の糸瓜が重く垂れおり（安中市）岡本千恵子
混色をするほど白くなる光受けて目覚める月曜の朝（筑後市）近藤 史紀
慣れたころ異動の辞令が降ってくる建築現場の足場が俺は（西条市）村上 敏之
食べ飽きて採らぬ胡瓜の実は太り得体の知れぬ作物となる（鈴鹿市）奥地 新吾
小文字やめ大文字にすれば意味を持つ二戦争省は戦争しよう（小金井市）神蔵 勇

【評】一首目、手応えのない時代に感じる昔のポンプの空気圧の重さ。二首目、ボールと木洩れ日がすれ違う一瞬の輝きが美しい。三首目、子供たちは皆トトロが大好きなのだ。十首目、アメリカ、「戦争省」への改名の真意はこれなのか。

うたをよむ 冥き遊星に人と生れて

井上 法子

今年山中智恵子の生誕百年にあたる。近年では水原紫苑編「山中智恵子歌集」の刊行や、角川短歌五月号の特集など、歌業の再興に光が射し込んでいる。水原は「韻律に乗せて人間存在を問うことを究極まで成し遂げたほとんど唯一の人」と山中を評している。

『みずかありなむ』
苦悩や痛み、悲哀や歓び、そうした人として背負う機微は、実は一見して「わからない」ところに宿るのではない。山中の歌を読むと、そう強く感じる。いづくより生れ降る雪運河ゆきわれらに薄きたましひの鞘 『紡錘』
静謐な時空で「雪」を見据え、その「生れ」る一瞬を読み手に差し出している。鋭く煌めく「たましひ」が、鮮やかに弧を描いて、「鞘」に収まる様子を想像する。それ以外の何ものをも招き入れず、そこできかずにできない、金属のさ

さやかに触れ合う音。まるでそれは、この歌を読んだときに耳に残る、美しい響きのようだ。あらゆるものと向き合い、その機微を逃さない「たましひ」の「鞘」。わたしにとってそれは、短歌というこの詩型かもしれない、とすら思う。さくらばな陽に泡立つを目守りあるこの冥き遊星に人と生れて 『みずかありなむ』
言葉を以て、わたしたちの「たましひ」の鞘に収めるべき光景を掬い上げ、まもりつつけること。それがこの「冥き遊星」に「人」として生まれた「われら」（歌人）

永田和宏歌集「わすれ貝」 69歳から72歳までの作品506首を収めた第16歌集。「十年をこの大学に働いて居ないあなたと過ごした十年」（青磁社・3080円）
平井弘歌集「羊をいつびき」 1936年生まれ、著者による第5歌集。「ゆづきといふ言葉はありますか争つてゐるうしろのそらす」（短歌研究社・2750円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。お問い合わせは03-5561-1111